

## P-227 肺小細胞癌切除症例の検討

自治医科大学呼吸器外科

長谷川 剛、遠藤 俊輔、佐藤 幸夫、斎藤 紀子、  
大谷 真一、塚田 博、蘇原 泰則

背景：当科の小細胞癌切除例を臨床病理学的に検討した。  
対象・方法：1990年から1998年末までの9年間に行なわれた肺小細胞癌切除例は13例で、そのうち12例（A群）を対象に検討し、以前に検討・発表（肺癌 vol. 29, 665-670, 1989）した75年から87年までの切除例9例（B群）との比較を行なった。結果：A群で術前小細胞癌の診断が確定していたのは3例、9例では術中又は術後に診断が確定した。臨床病期と比較して病理学的病期が上がった例が3例、同じ例が6例、下がった例が2例、不詳1例であった。死亡が確認された症例は1年以内に死亡していた。4例（36%）で5年以上の生存が確認されており、2年生存率54%であった。手術関連死亡は無かった。B群では手術関連死亡は2例。臨床病期と病理学的病期の比較で病期が上がった症例が5例、不変が3例、病期が下がった症例が1例であった。考案：A群での III A 期を含む小細胞癌手術例は5年生存率36%であった。周術期死亡例もB群の2例に対してA群は死亡例は無かった。当科は小細胞癌の内科治療例の生存率も合わせて提示し小細胞癌の外科治療の是非について議論したい。